The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「死後残したいもの」を青年期に想起する意義 : PAC分析による検討
Author(s)	田中, 和輝; 佐々木, 淳
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2021, 47, p. 165-183
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79074
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「死後残したいもの」を青年期に想起する意義
―PAC 分析による検討―

田中　和輝・佐々木　淳

目　次

１．問題と目的
２．方法
３．結果
４．考察

「死後残したいもの」を青年期に想起する意義
―PAC 分析による検討―

田中　和輝・佐々木　淳

1．問題と目的

現代社会では、様々な社会問題が昼夜問わずメディアや SNS を通して伝えられ、生きるうえで閉塞感が蔓延しているように思える。諸富 (1997) は「何もすることがなく、ただ漫然と毎日が過ぎていく」と訴える大学生が多いと述べ、頑張ることに意味を見出せない無力感が広がっていることを指摘している。生きていく意味を感じられない虚しさは依然として青年のこころの在り方を考えるうえで重要である。

浦田 (2013) によれば今生きている人生の意味を感じられない虚無的な人生観は、疎外感やアパシーなどの心理的問題につながる。この「人生の意味」について、浦田は大学生を対象にした面接から、死後の自分に関する何らかの永続性や象徴的不死性への暗黙の信念が、「人生の意味」への信頼を下支えしていると指摘する。換言すれば自らの人生を意味のあるものと感じるためには、肉体の死後も何らかの形式で自らの一部が残っているという実感が重要と思われる。石坂 (2009) は死の意味づけ尺度を作成する中で、「死後の永続性による受容」因子があることを見出し、臨床においても死への否定的な感情だけでなく、肯定的な意味づけや死を超えた永続性へ目を向けていくかかわり方の重要性を示唆している。本研究では、前述した死を超えた永続性について着目する。そこで、「死後残したいもの」を鍵概念として、青年に「死後残したいもの」が死生観や人生観に与える影響について検討する。

ところで、青年期の死生観研究を概観すると、死には自分自身の死である「一人称の死」、大切な他者の死である「二人称の死」、一般的な事柄、トピックとしての「三人称の死」と大別される。青年期に直接的に主題として死を扱うことは、人生そのものを考える機会となり、人生の基盤の形成につながるとされる（丹下 ,1999）。特に下島ら (2009) は自分自身の死を考えることが人生の延長上にある死を真剣に考え、生の大切さの気づきに繋がる、と一人称の死の重要性を主張している。これまで、海老根 (2012) によれば、死生観研究は死の不安や恐怖の低減を効果の指標としてきたことが多い。しかし、死は生き方や死の過程も含み多面的に理解されるべきものであり、海老根 (2008) は死生観教育の意義として、自らの死を意識することで生きる意味を考え、よりよく生きることの促進が重要であり、肯定的な意義にまで目を向ける必要を主張している。本邦では例えば、

大石ら (2007) の研究で、生まれ変わりや死後の生を信じる人は生きがい感が高い傾向にあると示唆されているが、とりわけ「死」だけでなくスピリチュアルな価値観を含む「死後」に焦点づけられた研究は散発的である。また、自分の死後、身近な他者や社会に対して残したいものについて、想起の意義に関する検討された研究は見当たらないが、前述したように「人生の意味」を下支えする、肯定的な意義も含む死生観研究の今後の研究発展の土台として、現代青年が「死後残したいもの」を語る特徴などを蓄積しておく必要があるといえる。

したがって本研究では、「死後残したいもの」の想起が、どのような連想を伴うか、かつ青年が今後生きていく上でどのような意義があるのかを個人ごとにクラスター（以下CL）を作成する手法である PAC 分析を用いて探索的に検討し事例的に提示することを目的とする。併せて、「死後残したいもの」を想起するうえでの特徴的な語りをまとめ、傾向を仮説として提示することを目的とする。

２．方法

2-1. 調査協力者

X 年 11 月～ 12 月にかけ A 大学の大学生・大学院生に協力を依頼し、計 6 名（男性 1 名、女性 5 名）に対して実施した。平均年齢は 20.2 歳 (SD=2.0) であった。

2-2. 調査・分析の方法

(1)　調査方法の選択

内藤 (1993) の開発した PAC 分析 (analysis of personal attitude construct) を用いた。これは、当該テーマに関する①自由連想、②連想 項目間の類似度評定、③類似度距離行列によるクラスター分析およびデンドログラム（樹形図）の作成、④実験協力者自身によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、⑤検査者による総合的解釈を通じて個人の態度やイメージの構造を分析するものである（内藤 ,1997）。

PAC 分析では個人の態度やイメージの主観的世界に迫ることが出来るとされ、個人内のコンプレックス等の潜在的構想を探ることも自由連想段階において可能であると内藤 (1997) は論じている。

本研究においても「死後残したいもの」は個人によって多義的で抽象度が高く、また死という受け入れがたい内容を含む。そのため、単に聴き取りという手法だけでは想起や解釈の段階で心理的な抵抗が生じうることや、語りの中でイメージ構造に迫ることが困難である可能性が考えられた。インタビューを通し、何らかの気づきが促され報告が期待できることからも、「死後残したいもの」の想起する意義を検討する上で適していると考えられた。

(2)　手続き

6 名の調査協力者に死生観に関する調査であると事前に伝え、個別に PAC 分析を行った。本調査では、要する時間が長時間になることを考慮しデンドログラムを作成するまでの作業で一度面接を終了した。その後インタビューを 1 週間以内に行った。一度目の面接では最初に次の連想刺激文を提示した。

「あなたがいつか亡くなった後に、残された大切な人、もの、あるいは社会へ「残したいもの」を１つ思い浮かべてください。「残したいもの」は形のあるものでも、ないものでも構いませんし、今持っていなくても、あなたがこれから成し遂げたり、将来手に入れたいものでも構いません。その残したいものについて連想する、あるいはしようとするとき、あなたは何を思い、感じるでしょうか。どうしたいと思い、実際にはどうするでしょうか。またそれにはどんな意味がありそうですか」

提示後、カードを手渡し、連想する単語や短文を浮かばなくなるまで記入してもらった。連想項目数に制限は加えなかった。併せて連想項目の重要度順に順位をつけさせた。次に、各連想語を全ての組合せで対提示し連想語間の類似度を 7 段階で評定させ類似度距離行列を作成した後、面接を終了した。

その後、検査者が単独で類似度距離行列に基づきクラスター分析（ウォード法）を行い、デンドログラムを作成した。2 度目の面接では、まず協力者に作成したデンドログラムを提示し、検査者がまとまりをもつクラスターとして解釈できそうな群ごとに各項目を読み上げ、調査協力者に確認し、申し出があれば連想項目の入れ替えに応じた。なお、本研究では調査協力者 1 名が入れ替えを申し出た。その後、各クラスターの併合理由及びクラスター間の異同、そして全体に対する解釈を報告させた。併せて項目単独ごとの＋－イメージを尋ねた。クラスターの命名は検査者が検査後に行った。

また、PAC 分析の終了後、補足インタビューとして、想起した死後残したいものとそれを選んだ理由について尋ねた。またその死後残したいものが調査協力者にとって生きる上で何か意味があるか、及び死後残したいものを考えた事による気付きを尋ねた。

３．結果

まず、初めに、調査協力者 6 名の「死後残したいもの」と補足インタビューで聞き取った理由や生きていく上での想起の意義を以下の Figure 1 に示す。

	A(女性)	B(女性)	C(女性)	D(男性)	E(女性)	F(女性)
死後残したいもの	精神疾患を持つ子供の支援	趣味で作っていた詩歌	音楽プレイヤー	よりよくなった世界	自分が書いた本	記憶
選んだ理由	研究室配属が最近あり，「ホットな話題」のため	社会的に意味がなくとも自分にとっては大事なもので，無くなってしまうとしたら悲しい	死んだ後に写真を見て笑われない。愚行が記録されない	一番抽象的であり，ここを目指せば間違いないと思った	名前を残したいなら残る。また，本という形式が好き	物が残るけど，結局は記憶
想起した物の生きていく上での意味	私の向上心の源	体力のない自分でできる手軽な趣味	今後曲を詰めて，年を取った時に振り返って思い出す	目標追求的。よりよく，を出発点とする	終わりの時間を考える。ちゃんと残すために必要なことを残す，考えるポジティブな機会。	苦い記憶は印象強いが，良くも悪くもポジティブに使いたい。辛い時にも踏み止まる
「死後残したいもの」自体の想起の意味	意味はあると思うがわからない	自分が自分として作ったことが大事	相手のことより，自分の死後に悪く言われないよう安定を願う。	自分が死んだ後の社会での生き方である	積極的に残せるという気付き。考えることで死への主体的なイメージを持て，ネガティブになりすぎない。	いつ死ぬかわからないから，今を大事に生きようと思える。一方で，残すことで悲しませたくない。

Figure 1　調査協力者ごとの死後残したいものとその詳細

また、調査協力者それぞれのクラスター (CL) と代表的な連想項目についてまとめた表を以下の Figure 2 に示す。

	A	B	C	D	E	F
CL1	支援の内容（Ex:役に立ちたい,海外の取り組みを日本で実施）	残すものを見て欲し対象の積極的な指定（Ex：見せたい人と見せたくない人がいる）	自分を自分の望む形で記憶してもらいたい希望（Ex:自分の趣味が一番詰まっているもの）	問いへの懐疑と批判（Ex:自分が今思いつく「死後残したいもの」が死んだ後でも誰かの役に立つのか）	創造する人になりたいという希望（Ex：表現する技能を身につけたい）	記憶を思い出させるメッセージ（Ex:メッセージ）
CL2	研究の手法（Ex:インタビュー）	残すものへの無価値観（Ex:すべてが残るのも嫌だ、残されても邪魔ではない）	嫌われる、否定され記憶されることへの防衛（Ex：自分自身が嫌っている顔や行動が残らないので気楽）	よりよくなった世界を実現する手段（Ex：自分の努力/働きかけによってよりよくなった世界	充実した自分の人生（Ex:一日悔いのないように）	音声で自分らしく残すこと（Ex:声）
CL3	研究の主題（Ex:X先生やY先生）	残す際の困難さや問題点（Ex:死んだ後に後世に残すのが難しそう）	他者へ接近することをめぐる葛藤（Ex：最終的に大切な人が私と同じものを好きでいてくれるかもしれないという期待を持てる）		残される人への想い（Ex:幸せだったかな、先に死にたい）	残すことによる負の影響の懸念（Ex:出来ることなら何も残したくない。思い出すことで悲しませたくない）

Figure 2　調査協力者ごとのクラスターと代表的な連想項目

死後残したいものについて、「精神疾患を持つ子の支援」「趣味で作っていた詩歌」「音楽プレイヤー」など、多様なものが挙げられた。全体の傾向は後述する考察で取り上げるが、本稿では紙幅の都合上唯一の男性協力者である D と、想起を通じて特徴的な語りを示した E と F について詳述する。

3-1. 調査協力者 D の事例

(1)　調査協力者 D のデンドログラム

D は大学 2 年生の男性で、死後残したいものとして「よりよくなった世界」を想起した。以下にデンドログラムを示す (Figure 3)。4 項目を書き終了した。D の反応項目は 4 つであった。4 項目と少なく、＋が 2、－が 2 であった。CL1 がマイナス、CL2 がプラスイメージで構成され、最も重要な項目として「自分がいま思いつく『死後残したいもの』が死んだ後でも誰かの役に立つのか」であり問い自体への疑問や批判的なイメージが大きかったと考えられた。

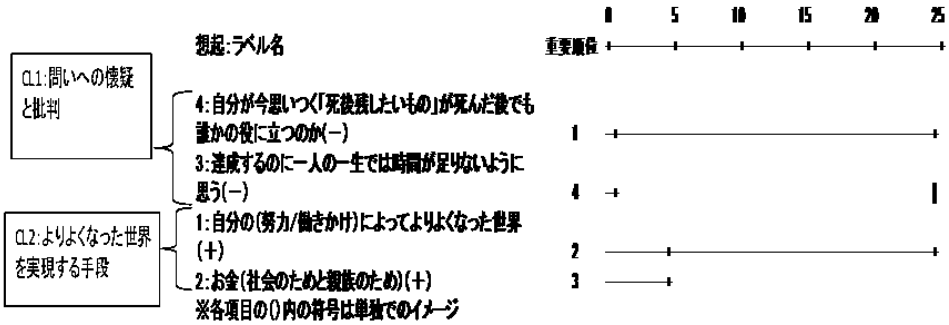

Figure 3　D のデンドログラム

(2)　各 CL に関する D 自身の解釈

CL1：**問いへの懐疑と批判**：「メタ的な視点」であり、「問題から一歩離れた目線」と語られた。「本当に死後役に立つのかな」と語り D は役に立たないと思われる理由について、死後、資本主義制度がこのまま維持されているか不明で、今の価値基準それ自体が未来では意味がない可能性があるためで、同時に自分がその目標を達成するにあたって自分がそうした能力を身に着けることができるだろうか疑問であると語った。

CL2：**よりよくなった世界を実現する手段**

以前からより良くしたい気持ちはあるが何が出来るかはわからないと語ったが、例としてお金を稼ぐことを通して「適切な場所に寄付が出来れば世界は良くなるんじゃないか」と思うと語った。寄付以外にも会社の株式に投資するなど、「正しい場所にお金を置く」ことが大事と考えていると話した。「お金で解決できる問題はそれなりにある」と数多くあると D は考えており、「よりよくするためにお金を使う」べきで、例え何億稼いだとしても、自分は普通の生活で構わないと思うと語り、「そんなお金が出来たら適切な

場所に割り振りたい」と語った。

(3)　CL 間の比較と全体に対する D 自身の解釈

CL1 と CL2 の異同

水準がそれぞれ異なると話し、CL2 が「もらった質問に答える流れ」であり、CL1 が「メタ」で「批判的」な構造であると語った。

CL の全体

「はっきりしてない」と話し、CL1 のように「世の中の問題を批判だけして」具体的にどうするか答えず、自分なりの回答を持たないことは良くないことだと語った。「残したいものはちゃんと決めておかないと残せない」ため、「実際人生生きる時はもう少しちゃんと考えないと」と語った。

(4)　補足インタビュー

死後残したいものの詳細と選んだ理由　「現状問題とされる、貧困、教育格差など、問題とされている問題が解消されている状態の世界」が D の考える「よりよくなった世界」であると語った。一方で「今の問題とされていることは本当の問題なのか」とも思うが、「よりよくなった世界」が「一番抽象的で、だからこそここを目指せば間違いない」と思うと語った。

残す場面

何か具体的な場面があるわけでなく、残そうと思って残すのではなく、毎日コツコツやれば残っている、というように考えていると語った。

残す対象

祖父が D に貯金を残してくれた経験を語り「未来の子どもや孫のため」と語った。

「よりよくなった世界」について考えることは D が生きるうえで意味があるか

将来生きていく上での「目標」で「目標志向的」なものと語った。「もう少し具体的にしないといけないが、よりよく、を出発点にすれば間違いない」と語った。

D にとって「死後残したいもの」を考えることはどんな意義があるか

「死後残したいもの」は「自分の身体が死んだ後の社会での生き方」だと語り、肉体が滅んだ後には自分の残したものしか残らず、「それで生きていく」という考え方が D にとって納得いくものだと語った。

3-2. 調査協力者 E の事例

(1)　E のデンドログラム

E は 24 歳の大学院生の女性であった。死後残したいものとして「自分が書いた本」を想起した。E によるデンドログラムを以下に示す (Figure 4)。重要順位の上位を概観すると①同時は多分難しい②先に死にたい③幸せだったかな④さみしいかな⑤子孝行する親でありたいであり、死に際し、残される人について感情を推し量る項目が多い。全体の 15 項目中イメージはプラスが 9、マイナスが 1 、どちらでもない「0」が 5 であった。「死

後残したいもの」を想起するにあたり概ね肯定的なイメージが優勢であると示唆された。

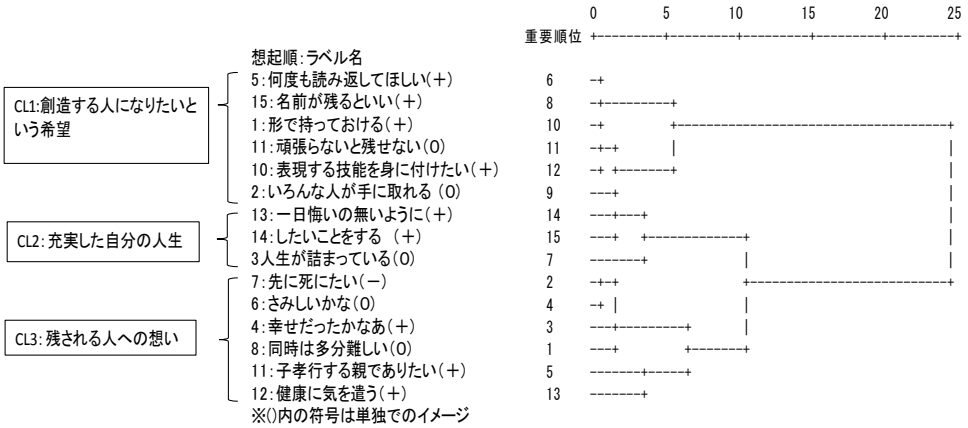

Figure 4 E のデンドログラム

(2) 各 CL に関する E 自身の解釈

CL1：**創造する人になりたいという希望**：創作物を「生産する側」になり、何かを形にして「誰かに残りたい」と気持ちで構成されていると語った。今の自分が創作物を消費するばかりの生活をしており、例えば絵、小説、詩を作りたいが今は出来ていないのが現状だと語った。努力しないと残せないと思うが「創作をする側に回りたい」気持ちは、今も持ち続けているという。授業中に絵を描く、小説を書くなど中高生の時期には創作活動に熱中したこともあったが、次第に創作のアイデアを思いつかず、「自分は天才ではないんだ」と思い、次第に創作物を作ることなく、消費する側に回ることを選んできたという過去を語った。

CL2：**充実した自分の人生**：死ぬときに残したいものを思ったときに、自分はどう思っているといいか、という気持ちでまとまっていると語った。悔いのない人生を送りたいと思っており、そのためにどうすればよいか考えているが、日々の密度を濃くすることが満足のいく死に際に繋がると思うと語った。「死後残したいもの」である、E 自身が執筆した本が、E 自身の人生が詰まっていて、それが反映されているならば、創作するためにも「充実して生きないと」と思っていると語った。

CL3：**残される人への想い**：自分の死に際や、死んだ後の周囲の人々の様子を連想したと語った。「どうだったかな、幸せだったかな」は配偶者や家族に対して慮る項目であり、「さみしいかな」「先に死にたい」という項目名は、自分より周囲が先に死なれると寂しく、そう感じたくないために先に自分が死にたいと思うと語った。「先に死んで悲しみたくないし、自分も悲しみたくないと思っているため、それなら「同時に死にたいが、難しい」と思う。「子孝行する親』「健康に気を遣う」という項目は生きている間にそのように振舞いたいとの思いがあり、CL3 全体として、は自分よりも周囲の他者を大切にしている

という共通点でまとまってると語った。

(3)　CL 間の比較と全体に対する E 自身の解釈

CL1 と CL2 の異同

CL1 は「ストイックな私」で「頑張らないと出来ない、目標を置いた私」の表現だと語った。一方で CL2 は CL1 で表した E 自身以外の「だらけたい自分、充実したい私も含んだ」充実した人生の表れであると語った。

CL2 と CL3 の異同

CL2 は「個人」で、CL3 は「周りのための私」のクラスターだが「したいこと、悔いのないように」という要素に「周りの人も入ってくる」と共通点を話し、「一方で対立している部分も」あると述べ、「健康に気を遣う」と「したいことをする」という項目は対立している要素であり、周囲のための自分を表現しているのは CL3 であると述べた。

CL1 と CL3 の異同

CL1 は「ストイック」で「自分のことしか考えていない私」を表しており、CL3 は反対に「協調」で「普通に生きるなら CL3 の生き方になる」と語った。「CL1 になるならそれなりに努力して志向しないといけない」が、やはり憧れがあると語った。CL 1 も E にとって大事だが、「だからどれくらいの配分でやっていくのがいいのかっていうのかっていうのは」迷っていると語った。

CL 全体について

「すごく揺れている自分がいる」ことに気付いたと語った。個人のために突き進む自分と周りのために生きる自分の両方が表現される中で、「現在の自分とのギャップも思う」ことや「未来、今想像している配偶者、それ通りになるか分からない」こと、「今の時点で想像できる未来とさえこんなに自分とギャップあるのにどうなっていくんだろう」と迷い、「どっちかに振りきれない」と語った。

(4)　補足インタビュー

死後残したいものの詳細と選んだ理由について

「死後残したいもの」である「自分で書いた本」は、ジャンルは小説でも、自伝でも構わないが、自分の専門分野の「本であればそれが一番いい」と語った。選んだ理由は E 自身が「本が好き」で、それはものとしても好きであるためと語った。また「大人も子どもも読むし、名前残したいなら残る」と考えているためと語った。

残す場面

「自伝だと死に際に振りかえってまとめたい」と語った。「定年後私ガラスペンで小説書きたい」と夢を語り、「具体的だけど、手で書く」形で本を作り、「作れるなら今でも」すぐに本を作りたいと語った。ただ、「余力があれば今すぐ何か作りたいのはあるけど、残したいというよりは趣味」にあたると語った。

残す対象

「自費出版なら家族」に残したいと語った。「本棚にそっと混ぜておいてほしい」と語っ

た。「家族に残したい私」と「世界に残したい私」があるが、手段は本で共通している。家族に対してはおそらく何かは残るだろうと推測するが、本でもふとした瞬間に自分のことを思い出してほしいと語った。世界に残すことについて「たぶん自己実現」だが「ちょっとわからない」と語った。

「自分で書いた本」を考えることはＥが生きていく上で意義があるか

「終わりの時間を考える」ことだと語った。いつか自分がしたいことは多くあるが、「死ぬまでとなるとなんだろう」と考え、「ちゃんと残せるまでに何がしたいかを考えさせられる」と語った。今後は親や周囲の人間が先に亡くなる可能性に触れ、「残される側の経験の方が多いと思う」と述べた。「残す側の想像は普段しない」ので、ちゃんとしたものを残すために必要なことを考える機会はＥにとって「ポジティブな体験」だと語った。

「死後残したいもの」を考えることはＥにとってどのような意義があるか

「積極的に残せるんだ、という気付きはある」と語り、「残すものって選べるんだ」と語った。「普通死んだ後の事は考えない」としつつ、終活など「死ぬ準備」に対して「ネガティブなイメージ」があると語った。最近祖母が家を片付け始め、それを見て嫌な気持ちが生じたが考えないといけないことでもあるとのこと。一方で死後残したいものを「考えることで、残ってしまうより残せるほうがいい。主体的なイメージを持っていた方が死ぬことについてネガティブになりすぎない」と意義を語った。

3-3. 調査協力者Ｆの事例

(1) 協力者Ｆのデンドログラム

協力者Ｆは大学１年生の女性。項目は８項目で残したいものとして「記憶」を想起した。以下にＦのデンドログラムを示す (Figure 5)。CL の確認時に「声」を CL2 に、「記憶」を CL1 へ入れ替える申し出があり了承した。また、ラベルごとの＋－のイメージについて、重要順位から①できることなら何も残したくない。思い出すことで悲しませたくない②（1 から）不安（思うこと）とあり、死後残したいものを想起することは否定的なイメージが優勢になっているとみられる。

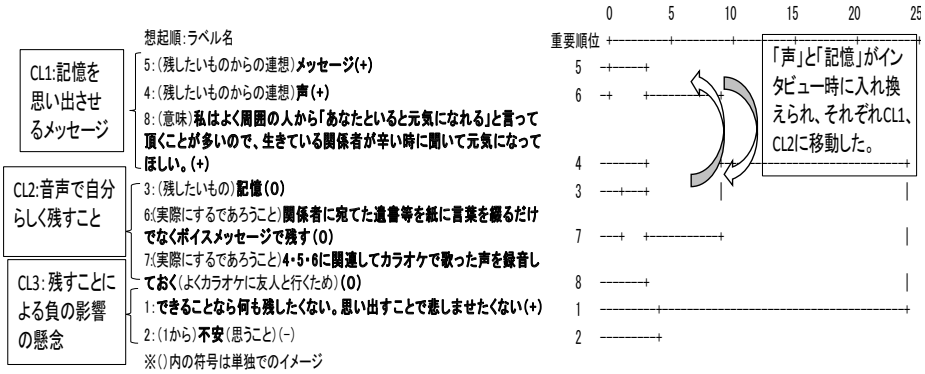

Figure 5　Ｆのデンドログラム

(2)　F 自身による CL の解釈

CL1：**記憶を思い出させるメッセージ**：生きている関係者が聞いて元気になってほしいというのは「記憶」を通してであると語った。CL 自体は「元気になってほしいというメッセージであり、メッセージは一緒にいた記憶に基づいている」という構造であると語った。メッセージは具体的には、「悲しんでる暇があったら笑っておけよ」という周囲を励ますメッセージであり、「暗い顔してたら不幸が舞い込んでくると思う」と F は語った。「あなたといると元気になる」とは、主に友人がそのように言ってくれ、F 自身も「基本的にテンション高い」ため、元気になってもらえたり、人の悩みを聞いたりすることも多いが、ネガティブな記憶を残すのはだからこそ嫌だと思うと語った。

CL2：**音声で自分らしく残すこと**：死んだら声は伝えられないが、録音しておけば声は、媒体を通してだけど残せる再生できる、「音声でまとまっている」「その声っていうのは遺書とかを読むとしたら朗読だし歌ってるとこは歌声になる」「紙以上の何かがあって」「手紙は筆跡とかでこの人ってわかるかもしれないけど」「自分は声の方が感情や思いが伝わると思う」ためと語った。歌を選んだ理由として F 自身がカラオケやバンド活動が好きでまた以前に友人へ励ますために歌のメッセージを送って感謝された記憶を挙げた。

CL3：**残すことによる負の影響の懸念**：「CL1 と CL2 に比べてネガティブ」であると語り、「CL1 と CL2 はポジティブ」だが、残された人の中で、寂しく、ずっと悲しいと思ってしまう人もいると語った。「だとしたら残ってしまうことで悲しい気持ちにさせてしまうのが嫌」であり、「残って喜んでくれる人もいれば悲しむ人もいる」と述べた。そのため、残された人が何を望むか次第ではあるが「だから何も残さないこと」が、「むしろ残すこと」を意味していると語った。「出来ることならば何も残したくない」という項目について、これまで生きてきて楽しいことばかりではなく、振り返って嫌な記憶もあるため」と語り、「思い出すことで悲しませたくない」という項目は、仮に何も残らなければ、「私の楽しい記憶を思い出して元気になってくれる人がかわいそう」だが、一方で、その逆として、「思い出すことで悲しませたくない」と語った。

(3)　CL 間の比較と全体に対する E 自身の解釈

CL1 と CL2 の異同

共通点は「メッセージということ」であり、「CL 1 はメッセージになってほしいという思い」「CL2 はそのメッセージの手段」で、相違点としては「CL1 は主観的、自分が主体でこうしたいと思うメッセージ」で「CL2 は、ベクトルは残す人たちに向いている」と語った。

CL2 と CL3 の異同

「CL2 はポジティブ、CL3 はネガティブ」で、「ベクトルが正反対」であるため、共通点は見当たらないと述べた。

CL1 と CL3 の異同

相違点は CL3 がネガティブで CL1 がポジティブな項目でまとまっており、対立して

いると述べた。一方で共通点として、CL3 が残すことで思い出させて相手を悲しませたくないというのは、CL1 が自分がいなくとも相手を元気付けようとする感情と重なっていると語った。また、メッセージも記憶も残された相手に自分を思い出させることで、かえって相手を悲しませるのでは、という「不安」に繋がっていると語った。

全体について

CL3 が「スタート」で、「一番大きい要素」と語り、「残すほうがいい人にとっては残す」が、「残す意味がない人には残さない方がいいって絶対初めに思う」と語った。自身の死後、残された人たちが「悩んだり不安になったりということがあって、その中で遺してほしいかなあの人たちはって思ったら残す」と語った。「例えるならすごろくの分岐点」であり、「初めに CL3 があって、残すなら進む」が、残さないなら、CL3 を選ぶような構造になっていると語った。

(4) 補足インタビュー

死後残したいものの詳細とそれを選んだ理由

多くの人はものを残すが、「物に記憶があるから」で、「結局は記憶に全部収束する」と語った。死後残したいものが「残って元気になる人前提」だが、「記憶をいかに残すかじゃないけど、より濃いものを残したい」と思ったと語った。F 自身の性格は、人によって相性があり「私のこと嫌いという人と好きという人に分かれる」ため「嫌いだっていう人には基本近づかない」よう普段から心がけていると対人関係について語った。また、残す記憶が、「全部が全部楽しい記憶にはならない、けど全部いいも悪いも含めて楽しかったと思ってほしい」と語った。死後残したいものとして記憶を選んだ理由として「生きたいように生きればいいじゃん」とメッセージを残し、残された人が「またポジティブに生きようかな」と前向きになってほしいためと述べた。

残す場面

普段遊んでいた場所や、いつも一緒に行った場所、などで思い出してほしいと語った。

残す対象

残す人それぞれに「私の記憶って違う」と語ったが、残すとありがたいと思う人を前提に、「地元の仲良かった人、楽しいときしんどい時一緒にいた人」や「慕ってくれる人」。「笑っててねって言いたい人」と挙げた。

「記憶」を考えることはＦにとってどのような意義があるか

嫌な記憶や苦い記憶は「ずっと残るしずっと縛られる」ものであり、影響力が強いものだと語った。一方で「ポジティブな記憶もエネルギーがあるなって思う」と語り、「ずっとしんどい時期があるとして、またあの子たちに会いたいなとか、楽しかったことしたいなって思ったことがそれまで頑張れるじゃないですか。嫌だってなっても踏みとどまれる。良くも悪くもエネルギッシュに、ポジティブに使いたい」と語った。

「死後残したいもの」を考えることはＦにとってどのような意義があるか

「難しい」と述べ、良い側面としては、「残したいと思っててもいつ死ぬかわからない。

今日死ぬかも明日死ぬか、長生きするかもしれない。人生に残された時間って誰にもわからない」ものであるとし、「今を充実させて生きてた方がそれこそ記憶とかは残るから。ものは用意できなくても記憶は残るから、毎日ちゃんと生きよう」と思っていると語った「後悔しないように生きようって。笑って過ごしたい」と付け加えて語った。

悪い側面として「何かを残すのは死んだその後どうなったかわからない」と「何か残ることで悲しむ人がいるかもしれないというデメリットがある」ため「リスキー」なものだと語った。残された人たちが「その後どうなるか確認しようがない。悪い方に転がるかもしれないときに私が何かしてあげられない」ため「押し付けているようなもの」だと語った。また、F は「死後残したいもの」を語る調査全体を振り返りながら、F は自身のことを普段は「ネガティブ」な人間だと思っていたが、「思ったより私ポジティブな人間だなって思いました」と語った。「自分のことについてはネガティブだけど、周りの人が絡んでくるとポジティブなのかも」と推測し、好きな漫画のキャラクターを挙げ、自分は「弱いですけど（そのキャラは）部下のために強くなる。そのタイプの人間なのかな」と語り、「結局本当に人に助けられてる恵まれてる」と「これを通して感じました」と述べた。本調査が、「そういう意味では自分を見つめなおすいい機会だったなって思います。自分のこれまでを振り返ったように思います」と語った。

4．考察

本研究では、PAC 分析（内藤 ,1997）を用いて、6 名中 3 名の協力者の「死後残したいもの」について事例を提示した。PAC 分析自体の性質も含め「死後残したい」ものとは個人の人格特性や、生活歴など、その他の様々な要因が反映された個別性を強く帯びた性質のものであるといえ、こうした語りの個別性を描写した点は本研究のひとつの意義と言えるだろう。ここからは、各事例について筆者自身の考察を加えながらまとめてゆく。

4-1. 3 つの事例に関する著者の解釈

(1)　筆者による D の事例考察

まずそれぞれの CL について概観したのち全体的な死後残したいもののイメージについて考察する。CL1 は「メタ的な視点」、「問題から一歩離れた目線」と語られるように、死後残したいものは何かとの問いにおいて、「本当に死後役に立つのか」と、批判や疑問を持つ態度としてまとまっている。一方で、CL2 は「よりよくなった世界」と残したいもの自体が記述され、「死後残したいもの」は何か、という問いに回答された CL とわかる。その中で「まだやりたいことはわかっていない」が、「正しい場所にお金を置くという見方」やお金で「解決できることもそれなりにある」といった実現の手段は D にとって実感のあるものとして語られるが、全体としては「はっきりしていない」と語った。「世の中の問題」に「批判だけして具体的にどうするか答えない」という態度と、「残したいも

のはちゃんとしておかないと残せない」との姿勢との間を行きつ戻りつしながら螺旋状に議論を積み上げていくイメージ構造と推察された。

またDにとって「死後残したいもの」を考えることは「目標試行的」である一方で具体的に何か行動や場面を伴って残すものでなく、日々を積み重ねる中でいつの間にか残るイメージであり、未来を考える中で今ここである毎日を充実させようとする実感を喚起させるものであるととれる。加えて死後残したいものというテーマ自体を考えることは、「死後の自分の生き方である」と語り、肉体が滅んだ後も何かが残る死生観が前提であるととれる。こうした死生観が祖父のエピソードの経験と関連があるかは不明であるが、浦田 (2013) の指摘するように死後の暗黙の不死性が「人生の意味」を下支えしていることを示唆する事例ともとれる。

(2)　筆者によるEの事例考察

CL1は「自分で書いた本」を執筆するにあたり表現する技能や努力の必要性及び、誰かに記憶しておいてほしい期待が表れており、Eの表現することをめぐる希望によってまとまっている。他のCLと比して「自分のことしか考えていない私」と述べるように、E本意の幼少期からの純粋な憧れの表れと推察される。一方でCL2は本を書く憧れも含みつつ広くE本人の生を後悔なく充実したものとするイメージでまとまっている。CL3はCL1と比して「周りのための私」と語るように将来の配偶者や家族といった身近な他者に対してEが今後生きて死ぬに際し想いを馳せているCLである。全体として「個」と「周り」に対してどう生きるか揺れていると語るようにCL1とCL3に現れた自己と他者をめぐる葛藤や対立を抱えつつ、CL2に表現された充実した人生を模索するプロセス自体が現れたイメージ構造となっていると推察される。こうした個人と身近な他者との関係性をめぐる葛藤は杉村 (1998) がアイデンティティ（自我同一性）発達の過程が自己の視点に気づき、他者の視点を内在化したうえで両者の食い違いを相互調整するプロセスであると指摘しており、Eのアイデンティティ発達のプロセスの表現とも理解できよう。Eは「死後残したいもの」を考えることを通じ、「終わりの時間を考える」と言うように自身の生の有限性を考える契機であったとみられる。普段死後について考えないと語るEにとって「残すものって選べるんだ」「考えることで、残ってしまうより残せるほうがいい。主体的なイメージを持っていた方が死ぬことについてネガティブになりすぎない」とは、不可避である死に対しても主体的に態度を選択することが可能であるという気付きであり、そうした積極的な態度は死が持つ負の印象を和らげる影響を与えたと推察された。「死後残したいもの」の想起がアイデンティティの観点から理解できることや死生観のポジティブな変容に寄与しうるととれる事例である。

(3)　筆者による協力者Fの考察

Fは記憶を残したいと述べるがCL3「残すことによる負の影響」がFにとって「一番大きい」と述べるように「死後何も残したくない」という感覚が、Fにとってクラスターの構造を特徴づけている。他方でCL1とCL2では残すとすれば自身の得意な「声」を

介してよい影響を与える要素でまとまったと推察された。残さないことを通して他者へ与える悪影響を回避しようとする感覚は、親密な他者を傷つけたくないという対人関係上での不安の表現ともとれる。一方で「死後残したいもの」を想起することの難しさが表現された事例である。しかし何かを残す / 残さないという語りの中で、対人関係を振り返り「人に助けられている、恵まれている」と述べ、「毎日ちゃんと生きようと思う」と最終的には自身を見つめる契機として語られている。「死後残したいもの」の語りが現時点での対人関係を振り返る機能がある事例としても理解できる。

4-2. 死後残したいものを考える意義について

総合的に考察するにあたり、「死後残したいもの」を想起する意義について、いくつか仮説として挙げる。まず第一に、自身の命が限りあることを知覚し、現在を生きることを大切にしようと考える機能があると考えられる。（例 :「残そうと思って残すんじゃなくて毎日コツコツやってたら残ってたくらいの気持ち（中略）「目標試行的」(D)」「悔いのないように、充実した人生を送りたい (E)」「毎日ちゃんと生きよう（中略）後悔のないように生きようと思う (F)」）石井 (2013) は死を想起させる文章課題から、青年は死を考えることを通して、有限性を知覚することで現在に対する時間的態度へ肯定的な影響を与え、それに伴い現在の充実や将来への目標志向性を喚起すると示唆しているが、本研究でも石井の先行研究に沿う結果が得られたといえよう。第二に、自分が大切にしたい価値観を想起することが挙げられる。(Ex :「私の向上心の源になる (A)」「自分にとっては大事に作ったものだったから（中略）それが何も無いまま無くなってしまうのは悲しいなと思って (B)」「何かを生産する側に回りたいという願望がある (E)」) また第三に自身と他者との関係性を再考することがあげられる。（Ex :「最終的に大切な人が私と同じものを好きでいてくれるかもしれないという期待 (C)」「個人のために突き進む自分と周りのために生きる自分 (E)」「周りに恵まれていると気付いた (F)」第二、第三の意義については、青年が「死後残したいもの」を想起することは、死の不安に触れるだけではなく、自らの生き方や重きを置きたい価値を考えると同時に、重要な他者との関係について思いを馳せる契機となる可能性を示唆している。

4-3.「死後残したいもの」想起を阻害する要素

一方で想起することを困難だと感じる語りがいくつか得られた。要素としてまとめ、() 内はその例となる発言と発言した研究協力者を示した。第一に、死後残したいものの想起頻度の乏しさ（Ex :「意味があると思うが考えた事がない (A)」、「考えることがわりかし初めてだった (C)」、「普通死んだ後の事は考えない (E)」) が挙げられる。第二に、死後残したいものを残すことの負の影響 (Ex:「残したところで、具体的にどんなふうになってほしいとかないし、大して影響はないだろうなと思っていて。意味があるのかな、だからどうするのって思う (B)」「死んだ後にまでからかわれたくない (C)」「死後残ること

で自分を思い出させて悲しませたくない (F)」) 第三に、死後残したいものが残る未来の不確定さ (Ex:「社会は変化するから、自分が亡くなった後は想像に及ばない (D)」、「未来、今想像している配偶者、それ通りになるか分からない (E)」）の 3 点があると推察された。自らの死を想起することは、恐怖や不安といった負担や否定的な感覚に触れざるを得ず、また青年期は自らの死が縁遠いものであり、具体的に想起をすることは頻度としては乏しいとみられる。また、自分の将来を想像するにあたって、社会や環境が変動する中で未来がはっきりと定まっていないと考えることが、「死後残したいもの」を想起する際に阻害する要因となったとみられる。協力者はそうした困難さから、死後残したいものを語ることに難しさを示したと思われる。ただ、E や F はそのうえで「死後残したいもの」を考える体験が肯定的なものであったと事例からは理解できる。一方で、調査協力者 A や C, D は上記の理由から連想することの難しさがあったと推察される。

4-4. 今後の展望と限界

最後に、今後の展望と限界について述べる。心理臨床の営みにおいては、岩城 (2004) が「いやなもの」の PAC 分析を考察する中で指摘するのと同様、死生観を話題にする際にクライエントからの表現を、クライエント自身が距離を取りつつ、セラピストと共に味わうことは自己理解を促進するために役立つと思われる。その上で、セラピストが死や生きる意味を語るプロセスの中に、セラピストの中にわずかばかりでも、「死後」やクライエントがいつかこの社会や他者に向けて残すであろうものに注意を向ける視座を持つことが、死の話題を過剰に忌避することなく、クライエントの自我同一性や対人関係の表現として理解を試みたり、幅広い時間の展望の中で理解することに繋がるだろう。一方で、阻害要因に挙げた考える頻度の乏しさや残すことの負担感から、セラピストが積極的に話題に出すことは、相応の心理的負担を強いる可能性が高い。調査協力者の中にも連想が膨らまなかった人もおり、積極的に死というテーマを扱うことには注意深くある必要があると思われる。一方で、死後残したいものを想起出来る / 出来ないという違いがどの点にあるのかは、今後の検討すべき事項でもあるだろう。

また、「死後残したいもの」に関する研究の方向について、近年実存的アプローチや死生学の領域において川島 (2003) はナラティブアプローチによる研究がさかんであると指摘している。本研究では 1 度のインタビューのみであり、その後協力者にどのような影響を与えるかは定かでない。「死後残したいもの」を語る語り自体が、継続的な関わりの中で質的にどのように変化するか、検討が望まれる。

他方、「死後残したいもの」と「人生の意味」の直接の関連性が不明であり、想起の意義についても代表的な語りから推察するにとどまっている。様々な価値観が媒介変数として機能していると思われること、また、実際の想起した前後で質問紙をとっていないため実際に指標として「人生の意味」に影響があるかは定かではない点も問題である。今後は「死後残したいもの」の想起の意義について量的に検討されることが望ましい。

引用参考文献

海老根理絵 (2008),「死生観に関する研究の概観と展望」, 東京大学大学院教育学研究科紀要 , 48, 193-202.

海老根理絵 (2012),「臓器提供をテーマとした経験的デス・エデュケーションプログラムの有効性の検討」, 死生学研究 ,17(1),295-324.

石井遼 (2013),「青年期において死について考えることが時間的態度に及ぼす影響」, 教育心理学研究 , 61(3), 229-238.

石坂昌子 (2009),「死の意味づけ尺度作成の試み」, 心理臨床学研究 ,26(6),734-740.

岩城晶子 (2014),「「いやなもの」についての臨床心理学的考察 -PAC 分析を用いた検討から -」,60,223-234.

川島大輔 (2003),「死の実存的意味を捉えるアプローチ : ナラティブアプローチの射程」, 教育方法の研究 , 6, 62-68.

内藤哲雄 (1993),「個人別態度構造の分析について」, 人文科学論集（信州大学人文学部）,27, 43-69.

内藤哲雄 (1997),『PAC 分析入門－「個」を科学する新技法への招待－』, ナカニシヤ出版 .

諸富祥彦 (1997),『フランクル心理学入門―どんな時にも人生には意味がある』, コスモスライブラリー .

大石和男・安川通雄・濁川孝志・飯田史彦 (2007),「大学生における生きがい感と死生観の関係－ PIL テストと死生観の関連性－」, 健康心理学会 , 20(2), 1-9.

杉村和美 (1998),「青年期におけるアイデンティティの形成―関係性の観点からの捉え直し―」, 発達心理学研究 , 9(1),45-55.

下島悠美・蒲生忍 (2009),「医療倫理と教育 (2) 五色カード法による死にゆく過程の疑似体験 (Guided　Death Experience)」, 杏林医学会雑誌 ,40,2-7.

丹下智香子 (1999),「青年期における死に対する態度尺度の構成及び妥当性・信頼性の検討」, 心理学研究 , 70(4), 327-332.

浦田悠 (2013),『人生の意味への心理学』, 京都大学学術出版会 .

The significance of thinking about what one wants to leave behind after their death in adolescents: An examination via PAC analysis (Personal Attitude Construct Analysis)

Kazuki TANAKA and Jun SASAKI

A nihilistic view of life has been linked to psychological problems such as alienation and apathy. Previous research suggests that the implicit belief in one's permanence after death and in symbolic immortality presupposes that one's life has "meaning." In addition, adolescents treating death as a direct subject is important in laying the foundation for them to think about life. The present study, therefore, used ＰＡＣ analysis (Personal Attitude Construct

Analysis to explore what kind of narratives adolescents form about the significance of what they want to leave behind after death. Six undergraduate and graduate students were interviewed after creating a dendrogram of "things you want to leave behind in society and to your loved ones after you die" as a prompt. Results indicate that they are able to imagine various kinds of "things they would like to leave behind after death," such as "books I wrote," "a better world," and so on. Three participants are described in greater detail as case studies. We suggest that thinking about what adolescents wanted to leave behind after death may help them perceive the finiteness of life and realize that they should cherish the present moment. We further suggest that the participants may be able to reflect on their own values and interpersonal relationships when prompted to think about their death. On the other hand, factors that made it difficult for them to respond to the prompt were (1) infrequent thinking about what they wanted to leave behind after death, (2) negative influences on what they wanted to leave behind after death,(e.g., friends remembering their dead selves and feeling sad) and (3) a lack of foresight about what the future might hold.